

の役割の追求を目的に以下の検討を行つた。

方法：腹水を有する卵巣癌，子宮体癌計5例の末梢血及び腹水より比重遠心法によりM $\phi$ 層を分離し，プラスチックシャーレ法により粘着性M $\phi$ をリドカインにより剝離させ，両者とも15%FCS-RPMI 1640中に $2 \times 10^5$ /wellに浮遊させ，① Latex粒子による貪食能，② M $\phi$ 表面上のIgG-FC-Receptor (FcR)をEA-Rosette形成試験(雄牛感作赤血球)により測定した。貪食能はM $\phi$ 胞体内に3個以上の取り込みを，rosette形成細胞は3個以上の付着感作赤血球を陽性とし，それぞれ200個を算定して結果を%，Indexで示した。また化学療法(Cis+Adria, Acracino-Aなど)による経日的変動について両試験により測定した。

成績：① 治療前の貪食能は37°C，16時間の培養でc-M $\phi$ ，P-M $\phi$ それぞれ $72.5 \pm 8.2$ ， $82.5 \pm 11.2$ を示し両者間に予め差が認められ，化学療法の続行に伴い，P-M $\phi$ はC-M $\phi$ に比べ減少し，その傾向は腹水減少例に著明であつた。② Rosette形成試験ではC-M $\phi$ ，P-M $\phi$ の%FcR，R陽性細胞はそれぞれ， $60.2 \pm 4.2$ ， $86.4 \pm 8.6$ を示しP-M $\phi$ に陽性細胞が高率に表われ( $p < 0.01$ )，更に化学療法に感受性を示し，C-M $\phi$ に比べ腹水減少に伴ない低値を示した。以上から末梢血中M $\phi$ ，腹腔内M $\phi$ の生物学的，免疫的機能は後者がより成熟傾向を示すが，化学療法によつてこれらは抑制され，やがてその傾向は腹水減少と関連して低下して行く。一方，C-M $\phi$ はP-M $\phi$ ほど直接の影響は受け難く，そのため monocuoe-M $\phi$ 系の維持機構として，新たに腹腔内への調節的動員や，腫瘍に対するeffector細胞としての予備能，あるいはT細胞，非依存性の自然抵抗性獲得，などに一連の役割を担う機序を有するものと考えられる。

### 287. 子宮頸癌放射線治療中の局所免疫応答と5年生存率との関連性

(岩手医大)

利部 輝雄，善積 昇，西谷 巖

悪性腫瘍の放射線治療においては，放射線による腫瘍細胞の破壊と同時に，免疫学的機序による腫瘍細胞の排除も関与すると考えられる。我々は，腫瘍局所における免疫反応を頸癌患者の腔スミア中の細胞表面IgM陽性単核細胞(SIgM細胞)の変動により観察し，5年治療との関連性を検討した。

方法：昭和48年から51年まで当科で観察した健常婦人25例，頸管炎患者10例，放射線治療を行つた頸癌患者27例を対象とした。放射線治療は10MV Linac X線

による外照射とCsによる腔内照射で行つた。健常婦人は来院時，頸管炎患者は治療前，子宮頸癌患者は治療前，1,000，2,000，3,000の各rad照射時に腔スミアを採取し，塗抹固定後FITC抗ヒトIgMヒツジ血清をもちいて染色した。スライドガラス上の細胞表面IgM陽性単核細胞を数え，非上皮性有核細胞にたいする比率を求めた。

成績：1. 健常対照，頸管炎患者および頸癌患者の腔スミア中のSIgM細胞の比率は，それぞれ $1.9 \pm 1.62\%$ ， $3.8 \pm 1.99\%$ ， $5.8 \pm 3.42\%$ であり，頸癌患者の腔スミア中のSIgM細胞の比率は他に比して有意の高値を示した。

2. 子宮頸癌患者の放射線治療中の腔スミア中のSIgM細胞の変動はさまざまであるが，大きく3群に分類される。すなわち，放射線治療中にSIgM細胞の増加をみるもの(A群)，治療中にSIgM細胞の減少をみるもの(B群)，治療中のSIgM細胞の変動が不定であるもの(C群)である。

3. 各群の5年生存はA群9/11(81.8%)，B群6/12(50.0%)，C群4/4であり，A群の5年生存はB群に比し有意に良好であつた。

質問 (札幌医大) 神谷 博文

① 放射線治療後の非特異的炎症像をとらえているように思われるが，この結果が免疫応答とする根拠は。

回答 (岩手医大) 利部 輝雄

放射線感受性は，癌細胞のD<sub>0</sub>値で定義される。

乳癌放射線治療中観察したD<sub>0</sub>と，今回のIgM陽性細胞の間に，相関はみとめられなかつた。

回答 (岩手医大) 利部 輝雄

座長 野田先生に対して

5年以内の死亡例について，局所再発か遠隔転移再発によるものかは検討していない。

### 288. 子宮頸部扁平上皮癌ならびに体部腺癌における病巣周囲間質動態の比較検討

(大阪医大)

佐野 隆，行村 純，庄田 博至

植田 政嗣，植木 実，杉本 修

癌の浸潤に際して，その病巣周囲の間質にみられる種々の変化は，宿主が示す防禦反応とも考えられ，この反応の程度は予後との関連性が深い。今回，子宮頸部扁平上皮癌と子宮体部腺癌について，腫瘍側因子(癌浸潤深度とCPL分類)と間質側因子(線維，基質および浸潤細胞成分)の相互の関係を検討した。

方法：頸部扁平上皮癌(頸癌)，Ib期以上32例，体部